



黄色

高瀬勝男

君達け黄色を知って居るか
これは私を非常によみこばしてゐた
ガールデンバットをスバスバふかしながら
私は生殖といふのを考へた
そこで
はつきりと
黄色が實感された
さうだ
太陽の様に

目次

- 黄色
- 喇叭
- らっぱの賦
- うじ虫ぢぢい
- 墓碑外一篇
- 猪狩満直さんと
その詩集 移住民
- 晝の畑で

△ 表紙

高瀬勝男
雄野 勇
松本 純一
長瀬 陸兵
佐藤 正美
長瀬 陸兵
猪狩 満直
(遷江)

喇叭

雄野 勇

もうひとときだ もうひととき！
鳴るを 生き、生きと
響くぞ てふれふと
その明徹な直線的音響に
腐れは 青々と廻り
群りは 族々と 足並を致しへ
明けゆく 穴のやうに ばら色は 拡つてゆく
續けろ もうひとときだ もうひととき！

その音響の合致するところ

おのおのはおのおのの 部署に着き、
おのおのはおのおのの 意志によつて 生活し、
おのおのはおのおのの 自由を 聯合によつて 守り、
おのおのはおのおのの 正しき 自治に 統制する
おのおのの 自由とおのおのの 正義とは
おのおのの 平和とおのおのの 領土する
喇叭 誰かが 一人ではない 全体の 喇叭
もうひととき、吹くのだ もうひととき！
おのおのの 口を 揃へ
おのおのの 力を 集めて！
鳴るぞ 生き、生きと

御音くで てふれふと
續ける らういといふこと
その音は 立日御音
音御音は波うって 續り 抗って反響する
あらぬ 部四角で 音御音は 音御音に合致する
續ける らういといふこと

うい虫あない

長瀬陸兵

腐る 腐る 腐る
くさって捨てられる
くさって捨てられる

昨日 親父が捨てられ

今日 おつ母が捨てられ
明日 兄弟が捨てられる

骨が折かれて
風穴があくまで
泥ろみづが溜るまで
弱い人間
小さい人間
おし前寺の上にはおぼろ服従の
のつかつてゐた

だが
みろ
こお高く積まれたその
腐れから
泥ろみづから
は穴から
ぞくぞく
ぞくぞく
這へ出した 俺等

うじ虫ぢやない
うじ虫ぢやない

墓 碑

佐藤 正三

落葉に埋もれた墓石の中に
生々しい一本の卒塔婆が立ってゐる
線香の煙が強い香を残して
虚空に消えてゆく

偶然の受胎より必然の死まで
苦難の中にうごいて来た人の

慟哭と悲嘆と憤怒とを埋めた
卒塔婆の上に落葉はしげつてゆく

夢 珥沙華の花がまたなびいて
秋の不規律な鼓動が
墓前に跪座してゐる
人々の面をちぎって行へた。

秋

太陽の輪郭が黄ばんで来って
蟋蟀の聲が
その醜いむくもを地上にさした
おゝかくも深く
我が心の紙形の上に
印刻されし秋の夕女よ
雑木林は只
廢墟の大きな建築物の骸骨

愁い深く沈んでゐる雲は
寒い十月の空気を抱いてゐる
まつ白い雪の
地表をぬりつぶす時が
寂かな冬が
もうそこに
冷然としてうまつてゐる

猪狩満直さん
その詩集 福住氏

長
野
県
戸
田
氏

播種者から
路傍詩から

穴から

無軌道から

澄江石から

二、三の通信から

私は満直さんを知った

其の他見たこともなければ、言したこともない
満直さんは私の未知の人だ
だが満直さんはよくちう私と云ひてゐる

満直さん

満直さん

満直さん

千里先の北海道の満直さん大志士

呼んでみる

或いは返事するかもしれない

ウワァァ

ワァァァ

ワアアイ

確に返す事

だんだん大きく段々はつきりしてくるんだ

それから遠眼鏡持つて屋根に上れ

と奥黒い顔が浮かぶんだ

だんだん顔が近寄ってこて

終へには眼と鼻と口付いた大さな顔が

現れ来るんだ

そこで俺は

顔と顔をくつつり合つて話すんだ

満直さん

あなたのアズマインキヨはとうとうした

確かに満直さんは私の知ってるんだ

混沌さんのお友達満直さん

鋤鋤かいで北海道へ行った満直さん

零下三十度の寒気と

吹雪と

かす雨と

雪を食ひ生じた満直さん、亦

生活してゐる満直さん

私の知っている此の満直さんがその詩集の作者

を私に送つて下さった。

ボロボロな襦袢のぶら下つた小屋で

満直さんは詩を書いた

馬場の上で満直さんは詩を書いた
おだけの手で満直さんは詩を書いた
そして満直さんは移住氏の表紙に斯う書いた

全国の百姓仲間
に
西辛原野にて
猿狩満直

あれあれ
あれあれ
満直さんは手を上げてゐる

ホロボロなおしめ
汗のパンパンする赤い足袋と毛糸と
お笠のやうなズックのゲートル

朝夕
山道入り
頭にひっかかって
なんとまあうるさいことだか
こいつが

萬國の
おれだれの国旗なんだぞいか

寒い時には火を焚くことさ、
流れがらつめられたら
雪を解かしてのむことだ
ウニテラの灯は
くらくとし
おれたちの食卓を輝す日は充分だ
腹がへったら
にくわんかじつて湯をのむ位な
ことはおぼえてあるね
あはけつて笑ふのか
まよよ
おれはおまへの泣きまじりし
偉大いま戸の方が腹わたにしみとける

(詩集 移住より)

今や満直さんは
私に
私たちに
はつきりと答へてゐる。

晝の畑で

猪狩登江

手の皮と膚が古びいゴム靴になった
毎日の百姓に
俺の手は
あきい草の汁と
肥料臭い土で
びりびりになった
この手だ
虫が鳴いてある晝の畑で
一体誰がこんな手な

見てくれるんだか

まっつと まっつと
俺は
今幾條のうねを
掘つくり返せばいいといふんだ

后記

★ 喇叭はやうやく三ッになった。
今少ししたら下駄を公身して歩けるやうになるかも知れない、こゝそんたう起きよう。

★ 何人とも云つても諸氏の玉稿が何よりの牧獲だ。こゝそん元氣のいい詩がみんちによつてとんとん喇叭の口から吹さ出さることはうれしい。
次々と御援助をわづらはしたい。

★ 長瀬陸兵の稿が一方運着したのではなれはなれに別れたことをわびる。

★ 寄贈誌感謝 詩南車・アカシヤ

★ いよいよ秋も深くなつた。
そろそろ寒くなるから俺たちは上靴を脱がふ。

(澄江)

昭和四年十月二十五日印刷
昭和四年十一月一日發行

非賣品

編輯者

猪狩 澄江

印刷者

猪狩 澄江

發行者

佐藤 正美

發行所

福島縣平田城跡佐藤方

喇叭詩社

新刊紹介	
雄野 勇著 詩集 發行所 山形縣南村山邸 北方詩社	定価五十五錢
猪狩 満直著 詩集 發行所 前橋市紅雲町五六 銅鑼社	定価七十錢

